

戦士の休息

目次

- 1 カッコイイとは、こういうことさ。……………1
ジョン・ウェインと三船敏郎
- 2 同じ映画を何度も観てきた。……………15
オードリー・ヘップバーン
- 3 ここ一番では、納得するまで時間を使え。……………29
『コクリコ坂から』
- 4 ナンバーワンであり、オンリーワン。……………43
チャーリー・チャップリン
- 5 「オールスター」を考える。……………57
『アベンジャーズ』
- 6 スウェーデンとハリウッドを観比べる。……………71
『ミレニアム』シリーズ

7	偉大なるマンネリズムについて。 「男はつらいよ」・「007」シリーズ	85
8	野球の映画は興味ない。 「がんばれ! ベアーズ」、 「プリティ・リーグ」	99
9	私の中には三船敏郎がいるのだろうか。 「用心棒」、 「椿三十郎」	113
10	戦争映画について書くのは難しい。 「史上最大の作戦」、 「私は貝になりたい」 「ハート・ロッカー」	127
11	故きを温ねて新しきを知れ。 『宮廷女官チャングムの誓い』ほか韓国時代劇ドラマ	141
12	私の映画ベスト10	155

13 半世紀にわたる筋金入りのファンとして、……………169

最近の日本映画を観た。

『手紙』、『阪急電車 片道15分の奇跡』

『ディア・ドクター』、『八日目の蟬』

特別対談……………183

山田洋次 × 落合博満

注……………211

あとがき……………241

1

カッコイイとは、こういうことさ。

ジョン・ウェインと三船敏郎

昔から「趣味は何ですか？」と聞かれると、「特にありません」と答えてきた。プロ野球界で生きてきた私に対して、それだけ熱心に仕事(野球)に打ち込んできたのかと思っただけのようだが、私自身は野球という仕事しかできない人間なのだと思っている。だが、振り返ってみると、少年時代から現在に至るまで映画だけは常に近くにあっていい。そんな私に、映画について書いてほしいという。個人的に映画を楽しんできただけで、人様に何かを伝えられるような観方をしてきたのかどうかは分からない。だから、取りとめのない内容になってしまうかもしれないが、ただひたすらに作品や俳優を通して感じたこと、私自身の映画への思いを綴ってみたいと思う。しばらくお付き合いいただければ幸いだ。

芝居小屋から始まった

一九五三(昭和二八)年二月九日、私は秋田県南秋田郡若美町(二〇〇五年に男鹿市と合併)という日本海に面した小さな町で生まれた。この年の夏に、日本テレビが日本初の民間放送として開局したばかりで、まだテレビがどこの家庭にもあるような時代ではなかった。あの当時、映画が最大の娯楽だった。七人兄弟の末っ子で、兄と一緒に、また祖父母や両親に連れられて観たのが、私と映画の出会い

だったと思う。確か、まだ入場料を取られる年齢にはなっていないかった。

私の地元では、芝居小屋で映画を上映していた。座席ではなく、広間の畳に思い思いに腰を下ろし、二本立て、三本立てで観る。その大半は東映のチャンバラ映画だ。片岡千恵蔵、中村錦之助、大川橋蔵、東千代之介、月形龍之介——。内容など分からなかったけれど、ただスクリーンの中で繰り広げられるチャンバラ劇にわくわくし、映画を観るという行為に心地よさを感じていたような気がする。

野球は小学四年生頃から、稲をかける杭を鈍で削ったバットにゴムまりの三角ベースで始めたのだが、映画鑑賞はそれより早かったというわけだ。時には、秋田市内の映画館まで出かけた。そこで観たのは三船敏郎の作品。『用心棒』⁽¹⁾や『椿三十郎』⁽²⁾を強烈に覚えている。

中学生になり、自分の意思で足を運んだ作品として覚えているのは、仲代達矢の『大菩薩峠』⁽³⁾だ。

野球部でも一年生から四番でエースとなり、毎日の練習は厳しかったが、たまの休みには映画を観ていたような気がする。そして、秋田工業高校でも野球部に入ったが、先輩からの理由なき鉄拳制裁に嫌気がさし、入退部を繰り返すようになった。大会前になると野球部長の先生に呼び戻され、その大会が終わるとまた退部する。それを七、八回は繰り返しただろうか。その退部している期間のほとんどは、一人で映画館に通っていた。当時の映画館は、入場料を一度支払えば、その日のうちはずっといられた。一日三、四回の上映をすべて観て、それを一週間続ければ二〇回くらいになる。そうやって同じ作品を何度も観たこともあるし、たった一度しか観なかった作品もあると思う。初めて観た洋画の『チキ・チキ・バン・バン』⁽⁴⁾で洋画にも興味を抱き、次第にオードリー・ヘップバーンのファン

になっていくのもこの頃だ。

そして、時代をずっと飛ばそう。私は二五歳でプロ野球選手となり、三冠王を三度手にした。妻・信子との間に長男も授かり、三六五日二四時間、常に仕事である野球についてあれこれ考え続ける生活を送ってきた。だが、そうした間も時間があれば映画館へ足を運んだし、ビデオを借りてきてルームシアターにすることも少なくなかった。映画という存在が心地よかったのもある。それ以上に、映画館にしろルームシアターにしろ、映画を観ている時間は他人に邪魔されない。そうやって自分なりに心身をリラククスさせる空間や時間を作っていたのかと思う。ビデオ映画を鑑賞し、エンディングのスタッフロールを見て「あっ、この作品は観たことあったな」と気づくこともある。ただ、兄に連れられて行った芝居小屋のチャンバラ映画から半世紀余りで観た作品数だけは、半端なものではないはずだ。

私の映画の観方

さて、映画についてあれこれと語る前に、私なりの映画の選び方、観方を書いておこう。まず、どんなジャンルの映画が好きで、一番好きな作品は何か。私の映画好きを知った人は必ず尋ねてくるが、私はこう答える。

「どんなジャンルの作品でも観ます。一番好きな作品はありません」

へそ曲がりのように聞こえるかもしれない。ただ、映画も人間と同じで、ひとつの作品の中に必ず

1 カッコイイとは、こういうことさ。

いい部分とそうではない部分があると思っっている。いい部分に共感すれば「感動した」、面白かった」ということになるのだろうし、自分の感性と合わない部分が強く印象に残れば、面白さを感じられないものだろう。私にとつて面白い映画が、ほかの人にとつても面白いとは限らない。その逆もあるだろう。だから、新作でもコマーシャルや前評判にかかわらず、どんな作品でも観てみることにしているし、何が一番好きかと聞かれれば、「どの作品もそれなりによかった」と答えるしかない。その中で「なぜ映画を観に行くのか」と問われれば、やはり「楽しみたいから」と答えるだろう。観ながら色々と考えてしまうものよりは、単純に楽しめるものがいい。そんな観点から、実際に起きた出来事を映画化した『実話モノ』は好きだ。「この時代はこうだったのか」、「こういう生き方もあるんだな」と、ある部分で納得しながら観ているのだと思う。それとは正反対に、まったくあり得ないであろうフィクションの極みのような作品に興味をそそられることも多い。宇宙人と戦ってみたり、一〇〇年先にタイムスリップしてみたり……。奇想天外なストーリーや世界観を「わあ、凄い」と感じながら、ただ楽しむのだ。

次に、観る作品を監督で選ぶことはない。映画監督とプロ野球の監督は、まったく性質の違う仕事なのかもしれないが、『黒子』という点では共通しているだろう。最近のスポーツ界では、監督という存在を必要以上にクローズアップする傾向が強い。例えば、長嶋茂雄さんが日本代表監督を務めれば、メディアはそのチームを「長嶋ジャパン」と呼ぶし、私が中日ドラゴンズの監督をしていた時は「落合竜」などと書かれる。私自身は、このことに強い違和感を覚えていた。スポーツの主役はあく

まで選手であり、監督の仕事は選手のプレーをサポートしながらチームを勝利に導くことだ。また、選手も監督もチームの一員なのだから、何かにつけて監督の名前だけが表に出るのは違うだろうと考えている。監督はあくまで黒子だと考えているから、映画を観る際にも関心を寄せるのは「どんな作品なのか」、あるいは「あの俳優はどういう演技をするだろうか」という点であり、誰が監督だからというのは鑑賞する動機にはならない。もちろん、監督に対して興味がないというわけではない。ただ、この監督なら必ず観る、あの監督の作品は観ないということはないだけだ。

そして、原作のある作品の場合は、原作を読まずに観ることにしている。その昔、「読んでから見るか、見てから読むか」とPRしたのは角川映画『人間の証明』だったか。私自身も新田次郎の『八甲田山死の彷徨』という小説を読み、その繊細な情景描写に大いに感動したことがあった。すると、それを原作にして映画『八甲田山』⁽⁵⁾が作られた。どんな描き方をするのだろうと楽しみにしながら観に行った。

物語は、日露戦争直前の一九〇二(明治三五)年、日本陸軍が寒冷地での戦闘の予行演習を八甲田山で行なった際、猛烈な吹雪ふぶきに見舞われて多くの死者を出した八甲田雪中行軍遭難事件を題材にしてい。小説にも著者の創作が加えられているといい、完全なるノンフィクションではないということだが、それでも極限状態に置かれた際に人はどうなるのか、臨場感を味わいながら読み進めた。

映画『八甲田山』は一九七七年に、高倉健、三國連太郎、北大路欣也の主演で公開され、北大路欣也が「天は我々を見放した」と叫ぶシーンが宣伝にも使われ、その台詞せりふは流行語にもなった。資料を

1 カッコイイとは、こういうことさ。

見れば、配給収入も当時の日本映画新記録という大ヒット作だった。

ところが、私は「面白い」と思えなかった。誤解のないように書いておくが、作品そのもののクオリティにがっかりさせられたのではない。俳優陣の演技も素晴らしかった。けれども、「これが新田次郎の小説の映画化か」と思うと物足りなく感じてしまったのだ。無理もない。小説は好きだけど文字を書き連ねて情景を描写できる。どれほど凄まじい吹雪だったのか、これが凍傷になるような寒さなのか、悲しいかな人はこうなってしまうのか。繊細な表現に、あたかも自分が同じ体験をしているかのように錯覚させられるほどだった。しかし、スクリーンではそこまでの細かさが描かれていなかったのだ。これは、文字による描写力と映像によるその違いなのかもしれない。あるいは、何度も読み返すことのできる小説と、シーンが次々と移り変わっていく映像では、脳や感情に対するインパクトが違うのかもしれない。とにかく、私が映画を観終わって真っ先に感じたのは、「もし先に小説を読んでいなかったら、映画を十分に楽しめたのかもしれない」ということだった。たまたま読んだことのある小説が映画化されて感じたことだが、それ以来、公開される映画に原作があると知れば、その原作を先に読むことだけはしていない。ちなみに、プロ野球界に入って間もなく、私はトレーナーから「君は読書が好きなようだが、視力に影響が出る。いい選手になりたかったら我慢したほうがいい」と言われ、パタリと読書をやめてしまった。だから、『八甲田山』のように、たまたま読んだ小説のちに映画化されるといふ悲劇には、二度と遭わなくて済んでいる。

これらが私の映画の選び方、観方である。もうひとつ付け加えるなら、映画館の座席はなるべく後

方で、一番右か左か、とにかく端にしている。中央に座ってしまつと、スクリーン全体を見るのに視線を左右に動かさなければならぬ。左右どちらかの端なら、そこを起点に一方向に視線を動かせばいい。そういう観方が好きなのだ。

二人のヒーロー

こうやって映画を観てきた私が好きな俳優は、女優なら先に書いた通りオードリー・ヘップバーン。男優はジョン・ウエインである。ジョン・ウエインを好きな理由は単純。だってカッコイイじゃん。

ジョン・ウエインの出演作を観たのは、自分自身で映画館へ通うようになってからだが、戦争ものでも、西部劇でも、喜劇っぽいものでも、「これがアメリカなんだろうな、アメリカ人の男なんだろうな」と感じさせる立ち居振る舞いに魅かれた。アカデミー主演男優賞を受賞したのは一九六九年の『勇氣ある追跡』(二〇一一年に日本で公開された『トゥルー・グリット』は、この作品のリメイクだが、私が最も印象に残っているのは『黄色いリボン』⁽⁷⁾)である。ジョン・ウエインが演じたのは、退役を六日後に控えた騎兵隊長ネイサン・ブリトリス大尉。最後の仕事としてインディアン種族との戦いを指揮するのだが、私の記憶に強く残ったのは、いわゆる西部劇としてのストーリーではなく、ヴィクター・マクラグレンが演じるひとりの軍曹との関わりだった。

クインキャノンというその軍曹は大の酒好きで、自分のすぐあとに退役する予定なのだが、ブリトリスは、何かとトラブルを起こすクインキャノンがその日まで何事もなく勤め上げられるか心配で仕

1 カッコイイとは、こういうことさ。

方がない。そこで、わざと酒を飲ませて仲間と揉み合いにさせ、懲罰房送りにしてしまうのだ。それならば、ほかに大きな問題を起こさないだろうというわけである。組織の長として部下にしてやれる優しさや人情味に心を動かされ、そういう発想は日本にはないかと新鮮味を感じた。このブリトリス大尉のように、ジョン・ウエインは私にとって「まさにアメリカ」という存在だった。

では、日本の俳優で一番好きなのは誰か。三船敏郎である。理由はジョン・ウエインと同じく「カッコイイ」から。彫りの深い日本人離れした顔立ちが、私が「まさにアメリカ」と感じたジョン・ウエインにも匹敵する。世界でも通用するのではないかという印象を抱かせる存在でありながら、一方では日本の男を象徴するような雰囲気醸し出している。ジョン・ウエインが「まさにアメリカ」なら、三船敏郎は「まさに日本」というイメージだ。若かった私が二人に感じた「カッコイイ」は「男らしさ」だったのかもしれない。

それから齢を重ねた現在でも、そうした印象は変わらない。そして、三船敏郎の主演作品を数多く観てきて思うのは、どの作品で演じた役を振り返っても、私の感覚の中では実にマッチしているという点だろう。例えば、徳川家康や豊臣秀吉といった歴史上の人物には実際に会ったことはない。彼らの姿や声を見たり聞いたりすることもできない。それなのに、私たちの中には自分なりの家康像や秀吉像が出来上がっている。肖像画を見たり、彼らを題材にした小説を読んだりしているうちに、自分なりのイメージが形作られていくのだろう。若い人なら、コミックが実写映画になる時、主人公のキヤストを知って「イメージと全然違う」と感じたり、アニメーション映画の声優の声を聞いて「こい

つはこういう声だよな」と納得したりすることがあるはずだ。俳優自身にもイメージが出来上がっていくゆえ、どんな作品でも演じる人物とその俳優との間にイメージのギャップを感じてしまうことは少なくない。三船敏郎という俳優は、私の中でそのギャップがほとんどなかったと言える。

『宮本武蔵』⁽⁸⁾、黒澤明監督の『用心棒』で演じた桑畑三十郎や『椿三十郎』、『天国と地獄』⁽⁹⁾で演じた製靴会社の常務・権藤金吾、『赤ひげ』⁽¹⁰⁾で演じた名医・新出去定^{にいでもしじょう}、『連合艦隊司令長官 山本五十六』⁽¹¹⁾、そして『日本の首領』⁽¹²⁾で演じた松風会会長・大石剛介——。時代劇でも現代劇でも、どんな時代のどのような人物を演じて、「ああそっだよな」と落ち着いて観られる。そして、どんな役柄にも「男らしさ」が感じられた。私自身は、そうやって観る者に一種の安心感を与えてくれるのが三船敏郎の魅力だと考えており、大きく言えば俳優に対して「カッコイイ」と感じる部分なのだろうと考えている。

戦後の復興を支えた日本の男らしさ

話は少し逸れるが、私はプロ野球界のスーパースターは後にも先にも長嶋茂雄さんと王貞治さんの二人しかいないと思っている。私を含め、長嶋さんと王さんが引退したあとにスーパースターと呼ばれた選手も何人かいるが、私自身は「普通のスター」だと思っている。スターの上にスーパーがつくためには、誰にも成し遂げられなかった領域に到達したという第一人者的な要素も必要だが、それに加えて活躍した時代も大きなポイントになるのではないか。日本という国が敗戦から立ち上がり、高度経済成長を続けていた昭和三〇年から四〇年代後半。この時代に、人々に大きな影響を与えた人こ